

ハルナのちから

春がもう少しでやって来る、ある日のこと。

小学生のハルナのうちに、大学生のはじめがやってきました。

はじめは、ハルナのおかあさんの弟で、

ハルナの自由研究を手伝うために来ていたのです。

「わたし、地球温暖化について研究発表しようと思ってるんだ。」

「じゃあ、図書館に行って、いろいろ調べてみよう。」

ふたりは、図書館に着きました。

「はじめにいちゃん、温暖化って、

地球の気温があつくなっちゃうことなんでしょ。」

「簡単にいうとそうだけど、

ハルナはどうして暑くなるのか知ってる？」

「人間が物を燃やして出す

二酸化炭素なんかの原因なんでしょ？」

「そうだね。」

二酸化炭素のような温暖化を進めてしまうガスは、地球のまわりをビニールの温室みたいにおおって、地球の熱を外に逃がさないようにしてしまふんだ。」

「でも、二酸化炭素って昔からあつたんじゃない？」

「いいところに気がついたな。」

でも、昔は二酸化炭素が少なくて

気温が1度あがるのに一万年もかかったんだ。

それが、今は気温が3度上がるのに100年しかかからないんだ。

動物やましてや植物は、そんな急な温度の変化にはついていけない。

そこが問題なのさ。」

「その、温暖化を進めるのは二酸化炭素だけなの？」

「メタンガスや一酸化二窒素、フロンガスとか、何種類かあって

そういうのを『温室効果ガス』っていうんだけど、

そのガスを減らしていかなきゃダメなんだ。」

そのとき、

グラグラ、ドカーン！

図書館が大きく揺れて、バタバタと本が落ちて来ました。

「はじめにいちゃん、あぶなくいい！」

大きな音を立てて、本棚が二人の上に崩れてきました。

(ゆっくりぬきながら)

どの位の時間がたったのでしょうか、はじめが気が付くと、となりに倒れていたハルナもゆっくりと目を開けました。

「ハルナ、ハルナ。おい、大丈夫か？」

「大丈夫だけど、口の中がなんだかザラザラするよ。」

「オレもだ。」

おいつ、まわり見てみるよ。何にもない、砂漠みたいだ。」

ふたりはあたりを見回しました。

図書館の建物はなくなり、まわりにあったはずの、銀行も、マンションも、コンビニも、何もかもが姿を消していました。

「私たち、図書館にいたんだよね。」

そしたら地震があったんだよね。

ここはどこなの？ 何が何だかわからないよお。」

二人はとにかく歩いてみることにしました。

足元の砂には、カンやビン、ぼろぼろのビニールなどが
たくさん埋もれています。

はるか向こうを見ると、渚がひろがっていました。

「あれは海だよね… どういう事？」

はじめは沖合に目をこらして言いました。

「観覧車?!」

うそだろ〜。」

「臨海公園の観覧車みたい…」

沖合の観覧車をぼうぜんと見つめていた、

はじめとハルナの背中を

何者かがツンツンと、つつきました。

驚いたはじめが後ろをみると、

そこには、見た事もない生きものがいたのです。

「な、なんだ、こいつは！」

「ぼく、ゴジドー」

「ハルナ、こいつ言葉をしゃべれるぞ。」

その言葉に、にこつと、ゴジドーが笑いました。

「ボク、ゴジドー。」

すぐく昔に起きた

原子力発電所の事故がきっかけで生まれた

生き物なんだって、

おかあさんが言っていたよ。」

ゴジドーは人懐っこい目をして、そのきっかけを二人に説明します。

頭と胴体は鳥で、足としっぽはヤモリ。

何でこんなへんてこりんな生き物が生まれたかと言いますと、

原子力発電所の爆発が起こって大量の放射能が出た時、

近くの博物館に冷凍保存されていた

ドードーという鳥の近くを

ちようどヤモリが通りかかったのです。

爆発で大量の放射能が出て、

それがドードーとヤモリのDNAを反応させ、

生まれてきたのがゴジドーだったのです。

「ドードーって、あの人間が絶滅させた鳥？」

「ちよつと待てよ。原子力発電所の爆発って？

もしかしてあの地震で？」

日本の原発は絶対、放射能漏れなんかおこさない設計だって

言ってたじゃないか。」

はじめは、嫌な予感がしました。

「ここはオレ達の住んでいた街に似ている…

でも、一面の砂漠と海。そして、このゴジドー。

あの大きな地震から、気がついたらここにいたんだ。」

はじめの頭に何かがひらめきました。

「オレ達はもしかしたら時間の移動をしてるんじゃないのか。」

「えーッ！未来に来たってこと？」

私たちの街は、いつか、こんなになっっちゃうの？」

「ゴジドー、いったいオレ達の未来、キミの過去に何が起こったんだ？」

ゴジドーは悲しい目をして答えました。

「人間がエネルギーをどんどん使って、二酸化炭素をたくさんだし、熱帯雨林の木をたくさん切ってしまって、森の力をなくしたせいで、地球の温暖化が急速に進んだんだ。

異常気象で豪雨が続き、川の水があふれ

洪水で建物がながされたかと思ったら、

今度は、暑い日が続いて水も干上がり

生き残っていた植物も死んでしまった。

街は砂漠になり、どんどん海面も上昇していつてこの通りさ。」

「そして僕が生まれたのは、原子力発電所の事故のせいなんだ。」

「原発事故で多くの放射能が外に出てしまったんだね。」

ハルナとはじめは、あらためて自分たちが未来の世界で二人ぼっちになってしまったことがわかりました。

「私たちここから前の世界に戻れないの？
いやだよ。」

「おい、ゴジドーなんとかしろよ。」

「なんとかしろって言われても…」

あつ、あの観覧車の中に過去と関係するものがあるって、父さんが話してた。」

「なんでもいい。手がかりになるもの探しにいこう。」

はじめとハルナとゴジドーは、
たくさん落ちているペットボトルで、
筏を作り、観覧車をめざしました。

観覧車の中には、

古ぼけたパソコンや携帯電話がころがっていました。

「ちえつ、バッテリーがきれてる。

電気がないところの機械もタダのガラクタだな。」

「あれ？この箱、光ってるよ！」

ゴジドーが何か古ぼけた箱をみつけたようです。

開けてみると、

中には『未来の私たちの街』という絵が一枚入っていました。

そこに描かれていたのは、

この世界と全く違う、緑の多い素敵な街でした。

「もう、遅いのさ」

はじめは、そうつぶやくと、

その絵を丸めてポケットに突っ込みました。

その時、また大きな地震が起こりました。

ゴンドラが大きく揺れます。

「おにいちゃん、手をはなさないで……」

二人は意識を失ってしまいました。

ハルナとはじめが現実の世界に戻って3ヶ月がたちました。東北で起こった地震は、大きな津波を起こし、大変な被害が出ていました。

ふたりが未来を体験するきっかけとなった地震は大きな津波をお越し、たくさんの犠牲者を生んでいました。

その時に起きた原発事故は、想像以上に大きく、いまだに放射能を出し続けていました。

それは、多くの人の行動や考え方をかえていました。

「おかあさん、私、原子力にエネルギーを頼ることは、いけないと思うの。安全なエネルギーを使って、温暖化をくいとめるためには、何が必要なのかな？」

「あらっ、なんだか急に大人になったのね。」

はじめとハルナは、目を合わせ、内緒だよね！とウィンクしあいました。

「やれることはたくさんあるのよ。」

まず、無駄なエネルギーを使わないこと。

それから、たくさんある自然エネルギーの中から、地域にあった発電を選んでじょうずに組み合わせれば、温暖化をとめることができるし、

原発に頼らなくても十分豊かな暮らしができるの。」

これは、観覧車の中でみつけた未来予想図です。

「ハルナ、ここには風力発電や地熱発電があるね。」

「この人達、家の近くで畑を耕してる。

車もほとんど走ってない。」

「オレ達がこの世界に戻れたのは、

未来予想図がオレ達に

砂漠と海と放射能の世界じゃなく、

もう一つの世界をつくれるか、

試そうとしたんじゃないか。」

「そうよ、今からでも遅くない!!」

ハルナとはじめの決心に応えるかのように、

絵のすみっこにある博物館のポスターで、

はくせいになったゴジドーが笑って手をふっていました。

おしまい。